

求婚の話がきているけれどもどうするかと母に問われたときに、わたしは思わず眉をひそめた。机にマジメ腐った顔で座っている母が、わたしを見上げている。隣に控えている父に視線を向ければ、いつもと同じように物静かにほほ笑んでいるだけだ。

今年で二十歳になるためそろそろ結婚してもおかしくない年齢なのだが、まだ気楽な身分でいたい。

「お母さま、まだ結婚なんてわたしには早いと思うの」

「あら、あなたそう言ってまだいろんな恋人と遊びたいだけなんでしょう？ この国の女はみんな気が多いけれどあなたは人一倍ですものね」

母が肩をすくめたけれど父はなんともいえない顔をして笑っている。母も若いころはいろんな場所で浮名を流したというから、なにか思い出したのかもしれない。

「まったくあなたは……。先方から送られてきた肖像画だけでも見てから考えなさいな。貴族の令嬢として、そろそろ身を固めるのにもいい年頃だわ」

ため息交じりにキャンバスに視線を向けると、穏やかにほほ笑んだ騎士が描かれていた。絹糸のようなプラチナブロンドの前髪を真ん中で分けて、襟足は少し刈り上げている。理知的な深く青い瞳も好印象だった。けれど、それより大きな問題は彼が隣国である騎士が治める国の男性だということ。

「……こんなに素敵なのに、隣の国の人じゃ結婚する気にはなれないわね」

わたしの住む国、メテオシユロスは代々女王が治める国で、女性の力が強い。一説には夢魔が建設した国との伝承があり、そのおかげか自由な恋愛が重んじられている。そしてそれを咎める人などもない。

でも隣国、ランツェブルグは違う。女性が婚前に異性と関係を持つなどもつてのほかで、結婚するまで清らかな身を保ち、結婚してからもよき妻よき母と

して邁進しなければならぬ。あまりに価値観の違う国なので、長い歴史のなかでも度々敵対していた。ただここ何十年かはその緊張も緩み、人々の交流も進んでいる。わたし自身も何度か隣国へいったこともある。主に両親が参加する社交の場や、冠婚葬祭への付き添いだが、こちらとはちがう厳格な空気がどうも肌に合わなかった。そもそもわざわざ窮屈に縛られる場所にいく意味を見出せないで、最近はめっきりご無沙汰になってしまった。

「どうせあちらの国の人だから、わたしに嫁いでもらいたいんでしょう？　そういうことならばお母さまから先方にはお断りしておいてね」

話はおわりだと椅子から腰を上げたとき、母が少し声を上げた。

「それがね、あちらは婿入りするつもりらしいのよ。そのくらい熱心に求婚されてるんだから、一度くらい会ってみれば？」

母の言葉に、わたしはチラリと肖像画に視線を落とす。好みの顔であること

は間違いないのでどうも腑に落ちない気持ちを抱えながらうなずいた。

求婚の話がもちあがった月末に、食事の席がもうけられることになった。皺ひとつない軍服をピシッと着こなして待ち合わせ場所に現れた青年は、肖像画よりもハンサムだった。アベルというその青年は穏やかで紳士的で、両親は一目見だけの彼がずいぶんお気に召したらしい。

母などはこっそりわたしに「あなたが今まで紹介してくれた恋人と比べても一番素敵じゃない」などと耳打ちしてきたほどだった。確かにいままで母親に紹介してきた歴代の彼氏は女の扱いになれた少し軽い男が多かった。でもそのくらいの方が気軽に付き合えてわたしとしては楽だったのだが。

両親はなにを氣遣ってか食事会の途中であとは若い二人に任せると去ってしまった。あまり氣乗りしないままレストランを後にしたあと、二人で街を散策

する。隣国とはいえ文化を異にする国のものが物珍しいのかアベルはせわしく視線を動かしている。

「シャルロッテ嬢、あれはなんですか？」

「あれは魔法の薬品を売っている店。おばあさんが一人でやっていてどんな傷にもよく効くって評判なのよ」

ゆっくりとした歩調で歩きながら道に並んでいる店をひとつずつ説明していく。興味深そうに瞳を輝かせていた彼が、突然立ち止まった。なにか見つけたのかと目線の先を追えば、なんてことのない、路地裏で情熱的にキスしている一組のカップルだった。

アベルは大きさに形のいい眉をひそめて、急いで視線を外す。いままで落ち着き払っていた青年があからさまに動揺している様に少しいたずら心がわいた。

「あら、あなたの国ではああいった光景は珍しいの？」

わたしが問うとアベルは頬を赤らめて頷く。

「そ、そうですね。ボクの国では婚前の男女が二人きりで街を歩くことも憚られますから。もしボクがあんなことをよそ様のお嬢様にしたなら責任を取ってすぐに嫁取りの準備をしなければなりませんよ」

純情な彼に、わたしはあんなものは珍しくないと追い打ちをかける。

「あなたの手に負えるような女性はこの国にはいないかもしれないわよ？　みんな隣国とは比べ物にならないくらい奔放だから」

そしてわたしもその例に漏れないというように微笑んでみせる。

「おかしなことをおっしゃいますね。ボクはそのくらい承知で来ているつもりですよ。ただ、実際に見てしまうと多少面食らってしまっただけです」

わたしが釘を刺したことに気づいたのか、まだ赤みのひかない顔で強がって見せた。

「あら、じゃあこちらでは結婚しても自由な恋愛を楽しむ人が多いのもご存じなのね？」

こちらでは法的な結婚をしても、ひとりきりの人間を愛せる根気強い人間はそう多くない。離婚の手続きも諸外国と比べればずいぶん容易だ。お堅いお国柄のアベルからしたら卒倒してしまうだろうが。

そこまで伝えるとアベルは考え込んだように顎に手をやる。

「ボクはできるだけだけ、シャルロット嬢に堅苦しい思いをさせたくはないのですが結婚してからもというのは看過できないですね」

「あら、それはどうして？」

「愛する女性が結婚したのちもほかの男性と親しい仲だというのは、ボクには耐えられませんからね」

「……愛する、ってあなたとわたしは今日初めて会ったはずなんだけれど。魔

術師の女が好きなの？ 頑張って手入れしている紺色の長い髪？ なにがお気に召したのか教えてくれない？ それとも、いままで周りにいないタイプだったから物珍しいのかしら？」

甘い言葉を囁く彼の意図がわからず、いぶかしげに瞳を見つめる。けれどもアベルは優しい笑みをたたえたまま、首を横に振る。

「……やっぱり覚えておられなかったのですね。しかし、それもあなたらしい」  
なにか小さくつぶやいたがわたしの耳には届かなかった。

「なによ」

「いえ、ボクは嫉妬深い男なので。愛する方がほかの男性と親しいのは耐えられません。しかし、他の男に目がやる必要がないほどあなたに尽くすと誓います。愛する女性に奉仕するのは、騎士の喜びですから」

「ふーん、そこまでいうならわたしも考えてあげてもいいわ」



わたしは手袋に包まれた彼の指を絡めとる。わたしよりはるかに体格のいい彼がびくりと肩を震わせて、みるみるうちに頬を赤くしていく。まるで恋を初めて知った乙女のような反応に、目を丸くした。

「へえ、あなた女性慣れしていないの？　かわいいのね」  
からかうように笑ってみせると、アベルは視線をさ迷わせてから観念したように白状した。

「ええ、お察しの通り経験はありません。あなたがはじめてですよ」  
まだ頬の赤みも引かないうちに長いまつ毛に縁どられた瞳を伏せる。その存外しおらしい反応に、さきほどまで彼をどこか疑っていたことを忘れて胸が甘く疼いた。

「ふふ、じゃあわたし好みの紳士になるように仕込んであげる」  
にっこりと微笑んで、さっそく彼の手を引いて馴染みの宿屋に連れ込んだ。

一緒にお風呂に入るかと声をかけたが、純粋な騎士には刺激が強かったようで断られてしまった。仕方なく先に湯浴みをすましてベッドで待っていると、がちやりと扉が開く。視線をそちらに向ければ、バスローブだけ身に着けたアベルが所在なさげに立っていた

「お、おまたせしました」

蝋燭の灯りで照らされた陰影から、均整のとれた鍛え上げられた肉体を持っていることがわかる。魔術師の多いこの国ではあまりお目に掛かれないカラダに、わたしは思わず口元を緩ませる。存外楽しい夜になりそうだった。

「緊張してるの？ こつちにいらっしやい」

わたしがそう微笑みかければ、アベルは従順にベッドの端に腰かける。これからまぐわおうとしているのに、距離を取る彼がおかしくて思わず吹き出してしまった。

「あら、そんな遠くに座したらキスできないじゃないの」

大きな体軀を縮こませているアベルににじりよって、胸筋を撫でる。

「なっ、シャルロット嬢」

力を入れていない胸筋は、ハリがあるけれどもやわらかい。その感触を楽しむようにムニムニと揉んでいたら途端に指が沈まなくなった。顔をあげれば、顔を真っ赤にして生娘のように震えている。身体もカチコチに固まっていて、いたずら心が湧いてしまう。

「あら、本当にはじめてなの？　まるでわたしに食べられるために童貞をこれまで守ってきたみたいね♡」

耳まで真っ赤にしたアベルをからかいながら胸板に乳房を押し当てる。むにっ♡むにっ♡と押し付けければ面白いくらいに肩が跳ねる。女のやわらかさも、彼にとってははじめての感触なのだろう。

「あは♡あなたってかわいいひとね♡ねえ、キスして？」

わたしが上目遣いにそうねだると、彼はおずおずと顔を近づけてくる。触れ合うだけの軽い口づけだけれど、アベルの唇がわなないているのがわかる。なぜだかわからないがこの青年は、自分に恋しているらしい。だんだんこのぎこちなさすらかわいく思えてくる。

「ふふ、よくできました。でもこんなじゃ、この国の女は満足できないわよ」  
わたしは自分からアベルの唇に吸い付いて、舌を忍び込ませる。アベルの肉厚な舌に自分のそれを巻き付け、ねっとり擦り合わせる。

「んちゅっ♡ふ、ちゅっ♡」

誘うように耳たぶをくすぐれば、アベルが戸惑いながら自らも舌を絡ませしてきた。初心な反応だけれども悪い気はしない。熱い舌が口腔を這えば、そのぎこちない動きに自然と笑みが漏れる。

「ほら、キスにばかり夢中になっちゃダメじゃない。触っていいのよ？」

筋肉で張り詰めた太ももにおとなしく添えられているだけの骨ばった手を取って、わたしの乳房に押し当てた。胸に節だった指が沈み込ませて、アベルはぎくしゃくとした笑顔で答える。

「や、やわらかいですね……」

彼の手の内にすっぽりと収まった膨らみを、慈しむようにやわやわと揉まれる。熱っぽい溜息を吐きながら、わたしのバスローブのベルトをほどけば、スボンと布地がベッドに落ちた。一糸まとわぬ姿になったわたしを、アベルはじつと凝視するように見つめる。ガラガラした視線に、わたしはうっとり瞳を細める。

「……とてもきれいです。夢で見たより何倍も」

恍惚とした顔をして褒められればもちろん悪い気などしない。

「ほら、あなたの好きなように触っていいのよ♡」

そう囁くとアベルは生唾を飲んで、乳房に手を伸ばす。膨らみの形を確かめるように縁にそって撫で上げ、やわく揉みしだき始める。彼の手の内で自在に形を変えられていく様を見せつけられたら、なぜか女神を崇めるようにわたしを慕う純情な男に抱かれるのだと身体が期待していく。

「経験はありませんが、書物での知識はあります。シャルロット嬢に気持ちよくなっていたかのように務めさせていただきますね」

おっぱいを揉みしだきながら神妙な顔で宣言する男に、わたしは思わずぷつと吹き出してしまった。

「ふふ、では本にはどうすれば女の子が悦ぶって書いてあったのかしら？ わたしの身体に教えてみて」

妖艶にほほ笑んで見せると、アベルはゆっくりと乳房に顔を近づけてくる。

白い膨らみに熱い吐息がかかりくすぐったさに少し身をよじる。ぬるくぬめった舌が少し震えながら乳輪の周りをなぞっていく。その初心なしぐさにぞくぞくといけない気分が湧き上がる。

「ふふ、アベルはおっぱいがすきななの？　いいわよ、あなたの好きにしてみてください」

アベルの頭を撫でながら促せば、立ち上がり始めた胸の先端に吸い付いてくる。ちゅっ♡ちゅっ♡と軽く吸い上げながら敏感な先端を舌で擦り上げる。あっという間に芯を持ってこりゅこりゅと固くなる。

「んっ♡じょうずよアベル、そのまま、あっ♡」

乳頭の窪みに舌をねじこまれるように押し付けられると、ぞわぞわとした感覚が背中を駆け上がっていく。思わず漏らした甘い声にアベルは瞳を輝かせる。

「シャルロット嬢、ここがイイんですか？」

「ん、そうよ♡じょうずね♡そのままいっばいかわいがって♡あっ♡」

わたしがアベルの耳朶をくすぐれば、アベルはもう片方の胸にしゃぶりついた。乳首をすっぱりと熱い口腔の中に招いて吸い上げながら、肉厚な舌で繰り返し左右に弾く。

「あ♡はっ♡」

本当に初めてなのか疑わしいくらい巧みな愛撫に、だんだん本気で感じてしまう♡胸の先っぽからジンジンと甘い痺れが、全身に広がっていく。

「んっ、ちゅっ、はあ、シャルロツテ嬢、乳首が弱いんですか？」

右の乳首にむしゃぶりつきながら、もう一方を指先でつまんでくにと優しく左右にこねられる。だんだんお腹の奥に熱が溜まってきて、蜜口がひくんっ♡と疼くのが自分でもわかる。はじめて女を抱くというこの男に気持ちよくさせられてしまう♡ベッドでの振舞なんてまったく知らないだろうアベルに、あ



またの男を手玉にとってきたわたしが乱されてしまう♡

そう危惧した瞬間、きゅんっ♡とお腹の奥が熱くなった気がした。とろおっ♡と粘った愛液が太ももを伝っていく。

「ん♡、そ、それ♡」

「ふふ、かわいらしい声をたくさん聞かせてくださいね♡」

上目遣いでギラギラと欲にまみれた瞳を向ける男に、思わず顔が赤くなる。手を握られただけで額に汗を浮かべていたから、簡単に御せるはずだったのに、当てが外れてしまった。

ぷっくりと膨らんでしまった乳首をぐいっとな親指と中指で伸ばされて、困惑している爪でカリカリ♡と引っかかれる。

「んひっ♡」

乳首に通っている神経を直接愛撫されたような鋭い刺激に、腰が軽く跳ねる。

素直に反応するわたしの身体がよほどうれしかったのか、アベルは満面の笑みを浮かべた。

「シャルロット嬢、なんてかわいらしい♡ボク的愛撫で気持ちよくなったださっているのですね♡」

わたしの汗で張り付いた前髪を払いながら、アベルは顔を近づけてくる。唇を奪われて、ぬるりと舌が侵入してくる。教え導くような口づけはもうできなくて、わたしは夢中で青年の舌と自分のそれを絡ませる。

「んちゅっ♡んっ♡ぐん♡」

お互いの口腔を貪っている間にも乳首を愛撫され続ける。弱すぎず強すぎない絶妙な力加減で乳首を抜かれ、太ももがふるふると震えてしまう♡とろり♡と蜜がシートに零れ落ちていくのを止められなくて、本気で感じているのがバレてしまう♡

「ふっん♡はっ♡あなた、ほんとうにはじめて？」

口づけの合間に疑問を投げかければ、男は至極真面目な顔をして頷く。

「ええ、はじめてですよ」

「ふうん、それにしても女の扱いがうまいのね？」

引き締まった腹筋を撫でれば、まだ何もされていないのにじっとりと汗ばんでいる。緊張のせいだろうか。

「ずっとあなたに身をささげる日を夢見ていましたから、そのせいですかね」

どういう意味かと問う前にアベルの顔がまた近づいてきた。敏感な口腔を味わい尽くすように口蓋も歯列も、あらゆるところを舐めとられる。

「んっふっ♡」

胸の突起の両方をつままれて、まるで糸をよるような手つきで左右にひねられる。舌を絡ませながら、乳首をずっと左右にクリクリとひねられて息があがつ

てしまいそう♡

きゅんきゅん♡と下半身に熱が溜まって行って、ふるふると太ももが震え始める。唾液を交換するような深いキスの最中でも、わたしの様子に気が付いたらしい。はたとキスを止めて、検分するようにおっぱいに視線を這わせる。

「ああ、シャルロット嬢の乳首、ぷっくり赤くなってますね」

「アベルがいつぱいかわいかったからでしょう？」

挑発するように微笑みかければ、アベルは乳首をぐにっ♡と指で広げて、指をねじこむくらいに沈めたかと思うと、カリカリっ♡と爪でひっかき始めた。

「あ♡そ、それはっ♡」

「ええ、この散々ボクが触って赤く熟れたこの乳首をカリカリってされるの、好きなんですよね？ さきほどこうして差し上げるとお顔が蕩けていたのですぐにわかりましたよ♡」

わたしの弱点がバレちゃってる。驚いて目を見開くわたしに構わず、うっとりとした顔で低く甘い声をわたしの耳元で囁きながら、敏感になった乳首に爪を立てる。

「ひんっ♡」

「シャルロツテ嬢、かわいらしいお声ですね♡ああ、ぞくぞくしてしまいます♡もっと聞かせてください」

わたしの反応に気をよくしたアベルは、乳頭の窪みを指の腹で思い切り押しつぶした。

「あっ♡」

ガクガク♡と腰が震え始めて、甘い痺れがせりあがってくる。身に覚えのある感覚、けれどいままで乳首だけ愛撫されて極めてしまうなんてことなかったのに♡

「ほら、遠慮せずにいってください♡シャルロツテ嬢のかわいらしい顔をボクに見せてください♡」

深い海のような瞳がわたしを捉える。なんとも思っていなかったはずの男に見つめられて、かあっと頬が熱くなったその瞬間、左右の乳首を根元からぎゅうっと搾るように強く抜かれた。

「あ♡、イクっ♡乳首だけでイッチャう♡」

媚びるような嬌声が勝手に上がり、わたしは胸元を反らしてぎゅうっ♡とシーツを握る。絶頂の予兆に舌を突き出せば、アベルは根元から乳首を引っ張ったまま、唇を奪う。

「んっ?! ふうっ♡んむっ♡」

舌を吸われながら、止めとばかりに突起を強く押しつぶされる。酸欠のぼうっとする頭でもわかる、お腹の奥から湧き上がるような快感の波。わたしは声も

出せないまま、ガクガクと腰が痙攣して、おマンコから透明な液体がぷしっ♡ぷしっ♡と吹き出して果ててしまった。

「は、はあっ♡はっ♡」

口の端から流れる唾液をぬぐうこともできないまま、わたしはひたすら酸素を取り込むように大きく肩を上下させる。シーツに流れる潮と愛液が、わたしが目の前の初心な男にいとまたやすくイカされてしまったことを示していた。

「シャルロツテ、イってしまわれたのですか？」

驚きと嬉しさが混じった声色で問われて、かあつと頬が赤くなる。なにかうまい言い訳をしようと口を開いた瞬間、たくましい腕を伸ばして抱き着いてきた。

「な、どうしたの」

「いえ、シャルロツテ嬢は経験豊富ですから、ボクで気持ちよくなってください

るか不安だったんです。ですから杞憂だったと知れるとうれしくて」

まるでじゃれつく犬のような振舞に、すっかり毒気を抜かれてしまったわたしはかるくため息を吐いた。

「そうね、あなたとっても上手だったわ。じゃあ、次はこちらを気持ちよくしてくれる？」

濡れそぼった秘所を見せつけるように太ももを開く。くちっ♡と粘っこい水音が響いて、アベルの喉が上下する。

「あなたがここをこんなにしたのだから、責任を取って舐めとってちょうだい」  
♡

わたしのことをなぜか熱心に慕うこの男なら、絶対クンニしてくれるはず。ちらりと視線を落とせば、バキバキと天を向いているチンポが見える。

キスしただけで、興奮しているのには気が付いていた。我慢汁ダラダラの童



貞チンポを早く女のぬかるみにぶち込みたいはずなのに、わたしをひたすら気持ちよくしようとしてずっと乳首に奉仕していた。

「あら、できないの？　できるわよね、アベルはいい子だもの」

「も、もちろんです」

腰に張り付きそうなくらいに勃起したチンポが、またビクッと震えている。

おあずけされたのに文句のひとつも言わないなんて、かわいい男だ♡

従順な舐め犬を手に入れた喜びに、ヒクヒクとおマンコがうずいてしまう♡  
食い入るように秘所を見つめるアベルの視線を感じながら、わたしはゆっくりと泉の土手に指を這わせ、くぱっ♡と広げて見せた。熱烈に自分に恋慕する男の視線に身体がうずいて、まだ触れられてもないのにぶくっ♡と肉芽が膨らんでいるのが自分でもわかる。メスのおいを漂わているそこを見せつけるようにゆっくりと自分で浅瀬をかき混ぜればとろりと愛液が流れ出る。

「んっ♡ほら、わかる♡あなたのせいで、いまこんなにいやらしいお汁垂らしてるの♡責任取って舐めとってくれるわよね？」

太い肉の幹が、天を向いてだらだらと先走りを流し早く挿れたいと叫んでいるけれど、おあずけだ。まずはたっぷりとその厚い舌で楽しませてもらう。

「あなた、わたしのこと大好きなんでしょう？ その言葉が偽りじゃないなら、もちろんできるわよね」

わたしは膝立ちになり、整った顔の上に恥部を晒す。まっすぐに伸びた鼻筋にぼたっ♡ぼたっ♡と水滴のように愛液が滴っていく。

「真っ赤に熟れて、ヌルヌルとテカっていやらしくて美しいです。本当にこのような榮譽をお許しくださるのですか？」

すんすんと鼻を鳴らして蒸れたいやらしいにおいをかきながら、犬のように女の股間を舐めることが名誉なことであるかのようにアベルが語る。その様子

があまりにもおかしくてわたしは吹き出してしまった。

「ええ、もちろん。わたしを愛してくれるのでしょうか？」

「っ、光栄です！ シャルロット嬢！」

わたしの痴態に興奮したらしいアベルはわたしの腰をがっしり掴んで、源泉を探すように肉厚な舌をぬるりと侵入させた。

「あ♡ひんっ♡」

アベルは尖らせた舌を、ためらいなく蜜穴に突き入れる。おマンコをほじくり返すようにねっとり抽挿された。あふれ出たメス汁をおいしそうに啜り、熱い息を肉芽に吹きかけながら夢中でおマンコを貪られる。

「あ♡ああ♡ふふ、むちゅうになっちゃって、あっ♡そんなに美味しい？」

整った顔に恥部を押し付けられても、アベルは嫌がるどころかむしろ嬉しそうに、深く舌を突き入れてくる。肉襞をこそぐように舐められて、太ももがプ

ルプルと震え始めた。わたしを喜ばせようとするねっとりとした舌遣いにだんだんと腰がくだけてしまう♡

「あ♡すごっ♡おマンコ舐めるのじょうずっ♡ちからぬけちゃうっ♡」

肉芽が皮のナカでさらにむくむくっ♡と大きくなってしまう。ピンっ♡と勃ちあがった肉豆が鼻先に触れて、びくんっ♡と腰が跳ねた。

「大変失礼しました。ボクとしたことがシャルロット嬢のかわいらしいクリトリスに奉仕するのをおろそかにしてしまっうなんて」

マジメくさった謝罪を口にしながら、アベルは触られるのを待ちわびたように膨らんだ肉豆を舌で左右にはじく。敏感な肉芽に与えられる刺激にわたしはペタンとアベルの顔に座り込んでしまった。

「あ♡それっ♡すきいっ♡」

身もだえるわたしのくぐもった声が聞こえる。腰を掴まれて少し浮かされた

かと思えば忠実に熱い舌で肉芽を押し上げるように根元から亀頭までねっとり  
と舐め上げられる。

「あ♡はあ♡♡」

「おや、シャルロット嬢のここはかわいらしい皮に包まれているのですね。剥  
かせていただきますね」

「あ♡♡んん、敏感なところなんだから♡♡丁寧にやさしくしないとだめよっ  
♡んん♡♡」

たっぷりと唾液をまとわせた舌がクリの根元をぐいぐいと押し上げる。そし  
てすっかり皮をずらされてしまうと、熱く膨れ上がった肉芽が直接空気に触れ  
て、それだけでも感じてしまう。泡立って白く濁った愛液を垂れ流すわたしに、  
アベルがくすりと笑う気配がした。

「シャルロット、本気のお汁がたくさんあふれていますね♡ああ、なんていやら

しくて美しいんだ♡」

睦言をつぶやきながら充血して膨らんだクリトリスにゆっくりと舌を這わせ  
る。飴玉を転がすように肉粒を嬲られて、鋭い快感が全身へ広がっていく。

「お♡ほっ♡それっ♡きもちいっ♡」

剥き出しの肉芽への絶え間ない刺激に、余裕のない濁った喘ぎ声で善がって  
しまう。やさしいご指導セックスをするはずだったのに、ただの快楽を貪るメ  
スになっちゃいそう♡ざらついた舌に自分でクリを押し付けるみたいに、ヘコ  
ヘコと下品に腰が揺れる。ズル剥けのクリはかわいいそうなくらい震えて、もう  
少しで極めてしまうと叫んでいる。